

6月25日土曜日熊本県薬剤師会館にて、良寛堂薬局 高濱 寛先生に「身近な漢方薬の使い方」について講義して頂きました。参加者64名と盛況でした。

まず、東洋医学の診断概念である「証」について学びました。東洋医学では「病名」ではなく、変化していく流動的な「状態」を診断して治療していきます。証は望（全身や局所の状態あるいは舌の状態）、聞（患者さんの声、排泄物の臭い）、問（主訴、身体状況、既往歴などを患者さんに質問し情報を得る）、切（体に触れる、脈をとる）という四診で推測します。

四診で得られた情報を八綱弁証の①表・裏②寒・熱③虚・実④陰・陽で分類して方向性をつかみますが、一般的には①～③が用いられます。表・裏は病巣の位置（病位）を意味し、表は体表、裏は身体の内部を指します。咽頭や口腔はその中間と考え「半表半裏」といいます。寒・熱は病質を意味し、悪寒や手足の冷えなど冷えている状態が寒、発熱や顔の紅潮など熱くなっている状態を熱といえます。虚・実は病勢を意味し、不足していることを虚、その逆で過剰になっていることが実です。不足するものは様々ですが例えば息切れなどは「気虚」になり、便秘（腹に食物が実している）は実に該当します。

また、東洋医学には「気・血・水」という概念があります。「気」は生命エネルギーのことで、例えば胃下垂、肌のたるみは気虚になります。「血」は血及び血が運んでくる栄養素のことで、例えば貧血は血虚になります。「水」は体内の水分のことです。東洋医学には「水毒」という概念があり水の多寡ではなく、めまいやむくみなど水の偏在によって水のバランスが壊れている状態を指します。水毒への対処は「利水」と呼ばれ、偏在を正そうというものです。

次に女性の3大処方といわれる「当帰芍薬散」「加味逍遥散」「桂枝茯苓丸」について学びました。当帰芍薬散の適応は、月経痛・不妊症・産後のケアなどで、証は裏寒虚で、当帰・芍薬・川芎・茯苓・白朮・沢瀉で構成されます。加味逍遥散の適応は、更年期障害、冷え、のぼせ、不定愁訴などで、証は裏熱虚で、当帰・芍薬・茯苓・蒼朮・牡丹皮・柴胡・山梔子・甘草・生姜・薄荷で構成されます。桂枝茯苓丸の適応は、少腹痛（月経痛など）やのぼせを伴う更年期障害、子宮筋腫などで、証は裏熱実で、芍薬・茯苓・桂枝・牡丹皮・桃仁で構成されます。配合されている生薬の性味から3処方の違いを学びました。実際に「当帰芍薬散」「加味逍遥散」「桂枝茯苓丸」を手にとって香りを嗅いだり形状を見たり、練習問題を解いたり臨場感あふれる講義でした。

本来ならこの研修会は熊本地震（本震）があった4月16日に開催される予定でした。地震から2ヶ月半、無事に研修会に参加できて幸いです。がんばろう！熊本。